

## ■第39回院内集会を開催しました

2月26日(木)午前11時より、参議院議員会館B102号室にて39回目の院内集会を開催しました。今回はアプリシェイト・フクシマ・ワーカーズ(AFW)を主宰する元東電社員の吉川彰浩さんから、「東京電力福島第一原子力発電所を視察して」と題してお話を聴きました。

吉川さんは福島県で起業なさった方々や復興に携わっている人々による福島第一原発の視察を企画し、今年2月16日に民間人では初めての事故現場の集団視察を実現しました。その趣旨は、報道や政治家の視察だけでは伝わってこない状況を、住民として現場で見て、周りに伝えるというものです。

AFWはその名のとおり、原発現場の理解促進と作業員の労働環境・生活環境改善のための支援を主要目的に掲げており、福島原発行動隊の目的とも相通じます。今回の視察報告もその観点が中心になりました。

講演の締めくくりで吉川さんが、廃炉事業に当たる東電と、それを見守る国民との、相互理解と信頼関係の醸成を強調されたこと、参会者の質問に対する吉川さんの打てば響くような的確な応答ぶりが、とくに印象に残りました。

なお、いつも院内集会のお世話をしてくださる牧山ひろえ参院議員(民主)から挨拶をいただいたほか、亀岡偉民衆院議員(自民)、階猛衆院議員(民主)、藤田幸久参院議員(民主)、太田和美衆院議員(維新)の秘書の方々が来場されました。

## ■東京電力と人々の間の溝を埋めるために

### 一 福島第一原発を民間人として視察して 一

吉川彰浩

私は2012年6月まで東京電力の社員として福島第一原発、第二原発で勤務していました。現在は、AFWというボランティア団体を立ち上げて、福島第一原発の状況についての啓発活動と現地の復興活動の支援を行っています。今は双葉郡広野町で里山再生事業とオリーブの栽培、それに中学生の学習支援のお手伝いを行っています。



1980年生まれの現在33歳です。東京電力の高校に入り、その時に原子力・火力を専攻したことによって就職は福島第一原子力発電所になりました。当時は双葉郡双葉町に住んでいました。およそ9年ほど福島第一原発で働いて、その後第二原発に転勤になりました。その時に結婚もして、浪江町に住みました。震災当時は第二原発で被災し、その復興業務に専念しました。2012年6月に、福島第一原発の中で起きていることが一般の人に正しく伝わっていない状況、また仕事をなくして辞め

ていく協力企業や下請けの方などの境遇を目の当たりにして、自分が東京電力社員でいることよりも外に出たほうが社会に役に立つのではないかと考え、東電を辞めました。

震災当時、双葉郡浪江町に住んでいましたので、現在避難生活中です。つまり事故を防ぐことができなかった会社の人間であり、同時に、その事故によって被災している方々と同じ境遇にいるということです。



### ●なぜ一般民間人によるF1視察をめざすのか

福島第一原発の視察を民間人として初めて視察したのは福島原発行動隊です。私が今回取り組んだプロジェクトでは、一般の方でも第一原発に入れるきっかけを作るために、東京電力と交渉して、一般民間人として初めての視察をお願いできませんかと申し入れ、その要請が認められて福島第一原発に入って参りました。

現在、東京電力と一般の方の間には深い溝ができてしまい、お互いに顔が見えない状況にあります。先日も、隠蔽と言われても仕方のない形で汚染水が海に放出されていた。もしも東京電力と一般の方が深いつながりがあるのであれば、私たちも情報を事前に入手でき、対策も打たれていただろうと思います。民間と東京電力が適度な距離感を持って繋がることは、これからの廃炉に向けて必須の課題だと私は思います。

### ●福島第一原発の現状

本日皆さんに認識していただきたいことは、お配りした福島第一原発の構内配置図に書かれているこれらの設備は「本丸」に手をつけるための前処理の設備である、ということです。その施設がこのように膨大なものになっている。その代表が汚染水タンクです。地下水の流入により増え続ける汚染水を浄化装置である程度浄化してタンクに溜めています。

本丸がどのような状況かといえば、とりあえずは安定して冷却できている。本丸の中の本丸といえば燃料です。廃炉では、溶けた燃料を安全な状態で安全な場所に保管しなければなりません。原子炉に入っていない4号機の燃料取り出しは終わりました。しかし1から3号機の燃料の状態はまだよくわからない。

比較的作業が入りやすい3号機の屋上部分の瓦礫を撤去し、燃料の状態を調査して、デブリの取り出しに挑戦する。「挑戦する」という言葉を使ったのは、今回の視察で小野所長とお話した際、デブリの取り出しについては技術革新がない限り、実際の取り出しまではできませんということを経験したからです。

## ●作業員の確保と労働環境の改善

作業員の数は2013年の12月頃から右肩上がりに増えています。当時は3,000人ぐらいだったのが、現在では7,000人になっている。増え続ける作業員は主に建設関係の方々で、原子力発電所に入って作業することが初めての方がほとんどです。建設業の方も防護服を着て、マスクを付け、暑さ寒さの中で作業をします。そうすると、人身事故がどうしても起きてしまう。先月は死亡災害も起こっています。

労働環境の整備という面では、全面マスクをつけないでいい範囲が大幅に広がっています。2年ほど前までは全域で全面マスクを付けなければならなかったのですが、除染の成果で放射線量が低減し、働く人にとっては煩わしい装備をしないエリアが増えています。

現在建設中の大型休憩所、入退域管理施設のすぐ隣にあるんですが、9階建て程度の、およそ1,200人が休める休憩所が今建設中です。これができればようやく作業員の方も暖かいご飯を食べることができるようになります。

もう一つ大幅に改善されたのは新事務棟が運用を開始したことです。奥行きがおよそ150メートルほどの二階建ての建物が作られました。主にここは東京電力社員の事務所として使われています。

こちらに建物がたくさん並んでいますが、ここは震災前、作業員の方々がかめていた事務所です。今は汚染していて使えません。整備されて開放されれば、働く方は事務所がすぐ近くになって、ご飯も食べることができるという環境ができるようになります。

環境改善ということでは、津波の被害にあった瓦礫の撤去があります。5、6号機の北に、昔7、8号機を建てるためにとっておいた空き地がありますが、そこに高線量瓦礫を移動させて、瓦礫だらけだった作業現場が整備されました。

これから、視察の際に撮ったスライドを見ながらご説明していきたいと思います。今回の視察がどのようなものであったのかを皆さんにお伝えして、現場の雰囲気を感じ取っていただきたいと思います。

## ●視察センター

視察者を受け入れるために東京電力はJビレッジ内部に視察センターを設けました。広報グループが中心となって視察に特化した専門社員のチームが設けられ、視察の前に説明をしてくれます。

## ●検問所

警察官が関係車両かどうかを一台一台チェックしますので、朝の通勤時はものすごい渋滞になります。田舎の細い道ですから時間がかかる。しかし防犯上どうしても取り外すことはできません。1時間で行ける距離でも1時間半、2時間とかかることになります。

## ●福島第一原発入口

入退域管理施設と言われる所です。作業する方はこちらで防護服に着替え、線量計を持って、福島第一原発構内に入ります。

入退管理施設の前ですが、これが福島第一原発だと言わなければどこかの工場のように見えます。ここまで整備されてきました。

入口に休憩施設があります。大型の休憩設備ができるまではこの仮設の、よく建設現場にある飯場みたいなものですよね。こういった所で休憩をしていただいています。

## ●大型休憩施設

相当大きな建物です。ほぼ完成している状態です。

## ●見学者用の部屋

ここで着替えを行いました。着替えと言っても、マスク、綿手袋、足カバーを付けるだけです。個人毎に線量計を渡され、積算線量を測ります。注目していただきたいのはこの若い女性の原発作業員の方です。若い女性の方も働ける状況になっている。今回私がお連れした中にも若い女性がいました。バスからの視察という条件付きですが、放射線量的にはかなり良い状況になっている。

チョッキを着ているのは、左胸に線量計、右胸にIDカードを入れるためです。ガードマンが立っていて、IDカードを持っていない人間はここから先には行けません。

## ●バスに乗り換える

ゲートを通過してバスに乗り換えます。後ろに見えるのが排気筒です。

## ●4号機原子炉建屋前

場所は4号機原子炉建屋の前になりますが、写真には原子炉建屋が写っていません。それには理由があります。防犯上の取り組みとして、防犯のための柵、監視カメラ、建物の出入口は特別な許可がない限り撮影が禁止されています。修理のためにどうしても設備写真を撮らなくてはいけない時以外は、社員でも撮影は許されていません。

今回私が写真撮影をしたのですが、柵や監視カメラ、出入口が写るという場面ごとにかかなりの撮影制限がかかりました。写すことができたのは、燃料取り出しのために建てられた建物だけでした。

## ●凍土壁

地上に60センチほどパイプが飛び出しています。1メートル間隔で、地中30メートルほどまで打ち込んである。このパイプに、冷凍するための液を入れます。そうすると周りの土が凍ってくっついてくる。土中をアイスキャンディーのように凍らせていくのです。

凍土壁というとは何かブロックする壁を打ち込んでいようなイメージで受け取られがちですが、実際は杭を打ち込んで、その杭から広がった霜がくっついて壁をなしていくというものです。杭の間がうまく凍らないと地下水をブロックできない。

凍土壁はあくまでも地下水の流入軽減対策です。他に打つ手がない状況の中でやってみる。効果はやって

みないと分からない。氷の壁がうまく固まれば、流入する地下水の量はかなり減るのではないかと予測されます。でもこれは予測でしかありません。地中は誰も調べることができないわけです。



## ●汚染水タンク

汚染水タンクの実物はこのようにものすごく大きいです。一基当たり1,000トンの水を貯蔵することができます。1,000トンを溜めるためにはこれくらい大きなタンクがいる。それを2日に一基作らないと間に合わない。汚染水をいつまでも地上に溜め続けることはできない。トリチウムだけを残して浄化した汚染水を海に放出する計画を以前から進めていましたが、それが実現するまではこんなに大きなタンクを2日に一基作らなければならない。

タンクを立てるにはコンクリートを敷き詰めた基礎から作らなければなりません。



## ●4号機前、西側の建物周り

ここは津波で瓦礫だらけだったのですが、細かい瓦礫は少々残っているものの、大きな瓦礫はなくなっている状態です。これによって重機も出入りできるような状況になっています。

## ●3号機屋上のクレーン

3号機は燃料取り出しの準備作業として、爆発でぼろぼろになった上部を全部取り外して、瓦礫を撤去しているところです。

3号機屋上に大型のクレーンが見えますが、人は乗っていません。ここに乗っているだけで大量の被ばくをしようというので、免震棟から遠隔操作をしています。表現は悪いがまるでテレビゲームのようだ、と説明する方もおっしゃっていました。遠隔で操作しながらこれだけ大きな機械を動かして瓦礫を少しずつ撤去しています。



## ●焼却炉

5、6号機の北西側に焼却炉を今建設中です。全国どこの発電所でも構内に焼却炉があります。作業で発生した防護服などを焼却してかさを減らして保管するためです。

福一で今問題になっているのが防護服をどうするかという問題です。1日に7,000人が入構しており、しかも1回の作業ごとに着替えます。例えば午前中にAエリアで作業をする。そして午後はBエリアでまた新しく防護服を着て作業をする。午前と午後で一着ずつ。14,000枚がゴミになります。放射性廃棄物ですから発電所の外で処分することはできませんから、構内で保管するしかない。現在、発電所に大量に保管されているわけです。

防護服が溜まり過ぎる、そのために作業を中断する、という事は実際にあり得る話です。私が働いてる時もありました。ですから作業を止めないようにするためにはこのような焼却炉が必要です。

以前の焼却炉は4号機の南側のエリアにありました。事故が起きて、高濃度の汚染水を蓄えられる所に入れてしまおうということで、焼却設備の地下1階と2階をタンク代わりにしました。そのために従来あった焼却炉は使えなくなってしまったので、今新しく建設しているわけです。

## ●伐採した木

私が勤めていた頃はこの辺りは全体が森でした。今は汚染水タンクのエリアです。そのために木を伐採しました。伐採した木そのものが高レベルの放射性廃棄物となっています。ですから構内に積み上げて保管するしかありません。これも焼却炉ができれば燃やすことができるでしょう。

## ●5、6号機前

車の外にいらっしゃる方は作業員の方です。5、6号機周りは防護対策が要りません。マスクも手袋もしないで作業にあたることができます。1、2、3、4号機から数百メートルしか離れていないエリアでもこうした状態になっています。

## ●倒壊したまま放置されている鉄塔

福一は外部電源、東京から電気をもらえずにメルトダウンに至った。鉄塔は地震によって崩壊しました。原子炉建屋ばかり注目されていますが、実際はここに付帯する設備も耐震性を持たなくてははいけない。「Fukushima 50」と呼ばれる方々が現地に残っていたけれども手が出せなかったのは電気がないから。車のバッテリーを外して対応したのも電気がないから。その元はこれです。これは東京電力も公表しています。

## ●物揚場

海に面していますから津波の被害が一番大きかった所ですが、現在はこうした大型クレーン重機も入れるようかなり整頓が行き届いた状態になっています。バスの中から視察をしましたので、海側がどうなっているかわかりませんが、東京電力の方が、海側から見た遮水壁の写真を見せてくれました。トレンチ内の汚染した地下水が海に流出することある程度防いでいます。完全には防げてはいません。

## ●事務棟

これは冒頭にお話ししました作業員さんの事務棟です。3階建てで、小学校や中学校と同じ程度の大きさです。こうした建物が全部使えないということは、現場作業の後、発電所を出て、避難区域を出てご自身の会社の事務所で仕事をしなければならないということになります。非常に非効率的なことが行われています。これが使えるのであれば、現場作業をした後で東京電力に提出する書類を作るのもここで済むわけです。

## ●車両整備工場

3月11日当日は金曜日で、車で作業に入られていた方もたくさんいらっしゃいます。その当時から数カ月の間、発電所構内で使われていた車両というのは修理のために外に持ち出すことができません。放射能汚染してもまだまだ車は走れるんですね。できれば使いたい。自前で修理するために整備工場が作られました。

ここに消防車が見えます。「冷却の多重化」ということで、冷却設備に異常があったときにはポンプ車を使うことになっています。この工場はこのポンプ車の整備をする場所でもあります。

また発電所の中にはガソリンスタンドもあります。ですから、発電所の中で給油ができて、故障を直すことができる。いずれも震災前にはなかった設備です。

## ●免震重要棟

免震重要棟の駐車場に車が止まっていますが、これは汚染した車です。構内からは出せないけれども構内では使えるわけです。

免震重要棟は内部もかなり整理された状況になっています。新事務棟が建設されたので、こちらに詰めている社員は今では6、70名ほどです。新事務棟が作られて、現在はこちらはあまり使われていないということです。

## ●免震重要棟内の緊急対策室

これでも当初と比べればかなりきれいな状態になっています。壁には全国から送られてきた応援のお手紙が飾ってあります。真ん中に丸テーブルがあり、ここに原子力規制庁の方が常駐しています。

モニターが福島第一、第二、柏崎、本店の対策室と常時つながっています。何か問題が起きると、この前に集まって対策を立てます。またこちらのモニターで1、2、3号機の状態がリアルタイムで見られます。



## ●Jビレッジへ

バスに乗ってJビレッジに帰ります。Jビレッジでフォローアップが行われ、今回の視察が終わりました。

Jビレッジに12時に集合して説明を受け、視察して帰ってくるまでおよそ5時間。原発構内の視察は1時間ほど。視察で浴びた放射線量は積算で10マイクロシーベルトでした。1時間という視察の中では外観しか見ることができず、詳細に見ることもできませんでした。

視察しての全体のイメージは、非常に整然とした作業現場に変わりつつあるということです。労働環境は震災当時と比べてずいぶんと良くなってきています。

でも、あまりにも整然としていると、すべてがうまくいっているという錯覚に陥ってしまう。しかし実際にはまだ本丸にすらたどり着けていない。本丸にたどり着くための作業をぎりぎりで行っているということです。

一昨日、汚染した雨水が海に流出していたというニュースが流れました。これまで東京電力は福島県の漁業関係の方々と信頼関係を築いて、浄化した汚染水を海へ放出をするという方針でしたが、この二日で完全に覆ってしまいました。これは当然だと思います。

今回の視察とこのニュースで感じたことは、東京電力と一般の方との間にあまりにも大きな溝があるということです。働いている社員の放射能汚染に対する感覚が半ば麻痺しているのではないかと。

今回の雨水が側溝に流れて放水口から海に流れていたという問題。よくよく考えれば震災直後からずっと汚れた雨水が海に流れていた。でも震災直後に比べればリッターあたりの放射性物質の量は激減している。働いている人の感覚からすれば、科学的に考えて影響の度合いが少ないから公表基準に達せず、公表しなかったという言い訳をしますし、民間からすれば、「いや多い少ないの問題ではない」ということになります。

根本的にはお互いの顔が見えていないのではないかと。一般の方は東京電力の顔を知りません。他方、東京電力も皆さんの顔を知らない。私たちは発電所の状況、そこで働く方々に思いを馳せることがで

きるような情報を一般の人と共有しなくてはいけない。

第一原発は自分とは関係ない、誰かがやってくれるだろう、と放っておいた結果が情報の不透明性に繋がり、自分たちの生活に跳ね返ってきてしまう。

民間と東京電力がある程度の距離感を保ちつつ情報の透明性をもって繋がるということがなければ改善されません。

東電が公開している資料を見てもネガティブなことがあまり書いてありません。これだけ見ると現場がどんどん良くなっているとの印象を持ちます。これからの課題が見えづらい。情報を出す側の感覚で私たちは情報を受け取るしかないという歪んだ状況がまだ解消されずにいます。

今回視察した福島の方々は、まったくイメージが変わったとおっしゃっていました。福島県内では毎日福島原発のニュースを流していますが、それでも地場の方々ですら第一原発の状況について知りません。ましてや県外の皆さんはもっと知らない。これは今回の視察で得た一番大きなことだと思っています。

## ■花供養に参列して

3月8日(日)いわき市久之浜で行われる住民67名(12名は現在も行方不明)の方々の追悼式にお招き頂き、埼玉の「絆ジャパン」様とバスを乗り合わせて計45名が参列いたしました。当日現地は風雨がとても強かったにもかかわらず、私たちが到着した10時半にはすでに多くの方々が参列なさっていました。

院内集会等で行動隊の皆様をお願いしたところ多くのご賛同を頂き、たくさんのお花をお贈りすることができました。

風雨が強く浜風商店街の見学が中止になるなど予期せぬ出来事もありましたが、最後に区長さんから震災当日の生々しい体験をお話し頂きました。第一波が引く時に見たことの無いほど沖に波が引き、海底が見えたので直感的に第二波の恐怖を感じ大声で「逃げろ！」と触れ回ったが多くの命が失われ無念だったとのお話がとても印象的でした。

今年で4回目の参列になり、年々顔見知りも増えて福島原発行動隊のパブリシティに多少はお役に立てたかと安堵しております。

## ■原発ウォッチャーの活動を休止します

2011年秋に発足して以来、原発ウォッチャーは毎月、東京電力のウェブサイトにも公開される膨大な情報とデータを基に福島第一原発の現状について分析して、報告書をウェブで公表してきました。

しかし、メンバーの世代交代が進まない中、現在のメンバーもご自身やご家族の健康上の問題などで活動を継続することが難しくなってきました。こうした事情を踏まえ、福島原発行動隊は、今年3月をもって原発ウォッチャー・チームの活動を休止することを決定しました。

事故収束事業が難航し今後の展望も不透明な中でこの決定は非常に残念ですがやむをえません。

これまで応援していただいた皆さまにはご期待に沿えなかったことを深くお詫びするとともに、以上の事情をご理解いただくようお願い申し上げます。